

永遠の真理

ETERNAL TRUTH



2020年 8月

「闘争と勇氣」「死後に何が起ころか(1)」「『一つ』とその証拠」「夏野菜のラタトゥイユ」

永遠の真理

いま永遠の真理の土台の上に堅く立ちなさい。(3T p.45)

目次

今月の聖書勉強

死後に何が起こるか (I)

4

聖書の教え

朝のマナ

闘争と勇氣

7

Conflict and Courage

現代の真理

「『一つ』とその証拠」

39

わたしたちが信仰の一致に到達するまで

力を得るための食事

「夏野菜のラタトゥイユ」

44

レシピ

お話コーナー

「ヨセフの墓の中に (II)」

46

イエスの物語

【正丸教会】

〒368-0071 埼玉県秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1
電話：0494-22-0465

【高知集会所】

〒780-8015 高知県高知市百石町 1-17-2
電話：088-831-9535

【沖縄集会所】

〒905-2261 沖縄県名護市天仁屋 600-21
電話：0980-55-8136

アクセス www.4angels.jp

メール sdarm.shomaru@gmail.com

発行日 2020年7月5日

編集&発行 SDA改革運動日本ミッション

〒368-0071 秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

Illustrations: Getty Image on Front page; Sermon View
on page 44

単純な代理人が用いられる

わたしに啓示がなされ、主が様々な方法や器を通してご自分のご計画を実行されることを示された。主がご自分の壮大で聖なる魂の救いという働きにお用いになるのは、タラントを与えられている人々や信任の高い地位を占めている人々、あるいは世的な見地から高い教育を受けている人々ばかりではない。このお方は単純な手段をお用いになる。このお方はご自分の働きの実行を助けるのにほとんど優位性を持たない多くの人々をお用いになるであろう。このお方は単純な手段を用いることによって、財産や土地を持っている人々を真理の信仰へと導き、これらの人々は感化されて、このお方のみ働きの前進において主の助け手となるであろう。(セクレット・メッセージ 1巻「16章リバイバルへの召し」より128)

バトル・クリークでの神の御霊の注ぎの後、大学において大いなる霊的な光の時は、それに比例した霊的闇の時でもあったことが証明された。サタンとサタンの代理人たちである彼のレギオンたちは地において、恵みの雨の効果をなくそうとすべての魂に押し迫っていた。その雨は、神が与えて下さったものを与えるために、眠っていた活力を決定的な行動へとよみがえらせ目覚めさせるために天から下ってきたのであった。そのときに光を受けたすべての魂が、ただちに神のご目的通り、自分たちの与えて下さったものを他の人々に与えるために働きに出ていったならば、もっと多くの光が与えられ、もっと多くの力を授けられていたであろう。神はひとりの人だけにではなく、彼が光を放散できるように、そして神が栄光を帰せられるように、光を与えて下さる。その感化力は感じられる。

霊的リバイバルと聖霊の注ぎの時は、どの時代も霊的な闇と優勢的な墮落が続いた。バトル・クリークでの機会と特権と祝福において神がなされたことを考えると、教会は自分の働きをなすことにおいて誉れある進展を遂げてこなかった。また神の祝福は、彼らが神のみ言葉の中でこのお方が指示された通りに用いない限り、さらに大きな光へと進展することによって教会にとどまることはない。はっきりとした明確な光線のうちに輝く光は道徳的な闇のただ中で薄暗くなっていく。神の真理の活動的な力は、敬神、熱心、そして無私の努力のうちに、他の人々の前に真理の光をもたらすために人間の代理人が神に協力することにかかっている。(セクレット・メッセージ 1巻「17章新しい経験を守る」より129, 130)

第18課 死後に何が起こるか (I)

人がエデンの園から追放されて以来、人の死後に何が起こるのかについて様々な推測がありました。死は、だれであろうが関係なく、すべての人に訪れる恐ろしい敵です。死は愛する人々を引き離し、最大の野心をも打ち砕きます。死後に何かあるのでしょうか。数多くの様々な理論が提示され、次世代へと引き継がれ、伝統が真理として受け入れられるに至っています。これらの様々な理論は大きく異なっていますが、その大半は一つの点において共通しています。それは人が不死の魂をもっているということです。この考えこそ、同じ推測に基づく他の多くの教えと共に、心霊術に強力な支持者を与えているのです。

人々は死後、なにか他のかたちをとって地上に生きつづけるのでしょうか。彼らは、宇宙のどこか他の場所へ行くのでしょうか。わたしたちは、自分たちの不確かな将来について何か知ることができるのでしょうか。あるいは死は終局でしょうか。多くの理論は空想的に聞こえますが、現実は何でしょうか。どれをとっても同じように空想的であり、その中のどれかを信じるだけの確かさや堅固な土台がありません。この主題を、生ける神のみ言葉から調べてみましょう。始めるにあたり、最初の人間が創造された過程を見ていきます。

人間とは何か？

第3課で、人間は神のかたちに創造され、あらゆる詳細において完全であったことを学びました。どのような段階が取られたのか、またその結果が何だったのかを見てみましょう。

「主なる神は土のちりで人を造り、命の息をその鼻に吹きいれられた。そこで人は生きた者(魂)となった」(創世記 2:7)。

人は、土に見られるのと同じ要素で構成されています。これは科学的な事実です。しかし、神が人間の体を造られたとき、それはあらゆる点において完全ではありましたが、まだ、完成されてはいませんでした。すなわち、一つの要素—命—が欠けていたのです。神は人間の鼻に命の息を吹き込まれ、これにより人は

生きた魂となりました。ですから、以下の等式が成り立ちます。

土のちり + 命の息 = 生きた魂

土のちり - 命の息 = 死んだ魂

死んだ魂 - 命の息 = 土のちり

そのため、人間が魂なのであり、多くの人々が信じているように、人間が魂を所有しているわけではありません。これは詩篇 104:29 の中で例示されています。「あなたがみ顔を隠されると、彼らはあわてふためく。あなたが彼らの息を取り去られると、彼らは死んでちりに帰る」。

神は、全ての命の与え主であり、支え主であります。わたしたちの創造主であられるイエスは次のように述べられました。「…わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。」(ヨハネ 14:6)。

何年にもわたって、科学者たちは命を生み出そうと努力してきましたが、無駄でした。命は命からのみ生じるとは、破られることのない自然の法則です。命は、決して死んだものから生み出されることはないのです。

魂は死ぬことがありえるか？

今、わたしたちは人が魂であるということを理解しましたが、魂が死ぬということはあるのでしょうか。

「罪を犯す魂は死ぬ」(エゼキエル 18:20)。

神のみ言葉によると、間違いなく確実に「その通り」です。これにより、死後に魂が生き続けるという理論に関する数多くの質問が生じています。第4課で学びましたように、人が死ぬのではなく、彼らが次のご命令に従うならば、永遠の命を得るとするのが神のみ旨でした。「しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを取って食べると、きっと死ぬであろう」(創世記 2:17)。

そのため、アダムとエバが神の戒めを破ったとき、彼らは罪を犯し(ヨハネ第一 3:4)、そしてその罪の制裁は死以外の何ものでもありませんでした。「罪の支払う報酬は死である」(ローマ 6:23)。

しかし今日、大多数の人々は、人間が不死の魂を持っていると、また体が死

んでも、魂は永遠に生きつづけると信じているのを見いだします。このような教えは、いつどこに起源があるのでしょうか？「さて主なる神が造られた野の生き物のうちで、へびが最も狡猾であった。へびは女に言った、『園にあるどの木からも取って食べるなど、ほんとうに神が言われたのですか』。女はへびに言った、『わたしたちは園の木の実を食べることは許されていますが、ただ園の中央にある木の実については、これを取って食べるな、これに触れるな、死んではいけないからと、神は言われました』。へびは女に言った、「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう」（創世記 3:1-4）。

この「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう」という言葉が、魂の不死についての最初の説教でした。神は、「きっと死ぬであろう」と仰せになりましたが、サタンは、「決して死ぬことはないでしょう」と言いました。またサタンは、彼らが禁じられた果実を食べたならば、彼らが神のような存在（不死の存在）になるでしょうと言いました（創世記 3:4）。

キリストは後に、信じないユダヤ人に向かって、彼らとサタンとの関係を次のように言われました。「あなたがたは自分の父、すなわち、悪魔から出てきた者であって、その父の欲望どおりに行おうと思っている。彼は初めから、人殺しであって、真理に立つ者ではない。彼のうちには真理がないからである。彼が偽りを言うとき、いつも自分の本音をはいているのである。彼は偽り者であり、偽りの父であるからだ」（ヨハネ 8:44）。

オクスフォードの辞書によると、「死ぬ」という言葉の定義は、「生きることが終了する」というものである。この定義は、神が次のように言われたことを表しています。「ちりは、もとのように土に帰り、霊はこれを授けた神に帰る」（伝道の書 12:7）。

闘争と勇気

Conflict and Courage



8月

8月1日

古代と現代の魔術

「王に言った、『主はこう仰せられます、「あなたはエクロンの神バアル・ゼブブに尋ねようと使者をつかわしたが、それはイスラエルに、その言葉を求むべき神がないためであるか。それゆえあなたは、登った寝台から降りることなく、必ず死ぬであろう』。』」（列王記下 1:16）

アハジヤは彼の父の治世の間、至高者であられる神の驚くべきみわざを目撃したのであった。彼は、守るべき神の律法の要求を無視する人々を神がどう扱われるかという恐るべき証拠が、背信したイスラエルに示されたのを見た。アハジヤは、こうした恐るべき現実があたかも愚かな話であるかのように行動した。彼は主の前に彼の心を低くするかわりに、バアルに従い、ついに、この最も大胆な不信行為に走ってしまったのである。……

今日、異教礼拝の神秘的儀式にかわって、秘密結社、降神術の集会、心霊術の霊媒などの薄暗さと不可解さがある。神のみ言葉、または、聖霊による光を拒否する幾千という人々が、これらの霊媒の言うことを熱心に受けいれている。……

ほとんどすべての種類の心霊術の主唱者たちは、癒しの力を持っていると主張する。……このキリスト教時代にあつてさえ、生きた神の力と資格をもった医師の技術に信頼せずに、こうした治療者のところへ行く人が多くある。……

……イスラエルの王は神をすてて、神の民の最悪の敵の助けを求め、天の神よりは異教徒の偶像の方を信頼していることを、彼らに宣言したのである。それと同様に、人々が力と知恵の源泉であられる神を離れて、暗黒の君の援助や勧告を求める時に、神のみ栄えを汚すのである。……

サタンの魔術に身を委ねたものは、大きな利益にあずかったと誇ることであろう。しかし、それが、賢明で安全な道であることの証明であろうか。生命が延ばされたならどうなるだろうか。物質的利益が与えられたらどうなるだろうか。それは、最後に、神のみこころを無視したことの埋め合わせになるだろうか。一見、利益と見えたことは、みな、最後に取りかえしのつかない損失となるのである。神がサタンの力から神の民を守るために設けられた防壁を一つでも破壊するならば、必ず罰を受けるのである。（国と指導者上巻 176-180）

最も手近にある働き

「小事に忠実な人は、大事にも忠実である。」(ルカ 16:10)

神はエリヤに、もう一人の人に油を注ぎ彼のかわりに預言者とするように、お命じになった。神は言われた、「シャパテの子エリシャに油を注いで、あなたに代って預言者としなさい」(列王紀上 19:16)。エリヤはこの命令に従ってエリシャをさがしに行った。……

エリシャの父は富裕な農夫であった。そして彼の家族はほとんどすべてのものが背信している時にも、バアルにひざをかかめなかった人々であった。彼らの家では神をあがめ、昔ながらのイスラエルの信仰に忠誠をつくすことが、毎日の生活の規律であった。このような環境の中で、エリシャはその幼少時代を過ごしたのである。彼は静かな田舎の生活の中で、神と自然の教えと有用な働きの鍛練を受け、単純な習慣を養って両親と神に服従することを学んだ。これが後に彼が占める高い地位に彼をふさわしくする助けとなったのである。

預言者への召しがエリシャに与えられたのは、彼が父のしもべたちと畑を耕していた時であった。彼は自分の最も手近にある仕事をしていた。彼は人々の間で指導者となる能力もあれば、また常に快く仕える謙遜な気持ちも兼ね備えていた。彼は静かで温和な性質であったけれども、精力的で着実な精神も持ち合わせていた。彼は高潔忠実で、神に対する愛と畏敬の念を持っていた。そして、日常生活のいやしい仕事の中で、確固とした目的と気高い品性を養い、常に恵みと知識を増し加えていった。彼は家庭における務めを果たして、父親と力を合わせているうちに、神とともに働くことを学んでいたのである。

エリシャは小事を忠実に行うことによって、より重い信任を受ける準備をしていた。彼は毎日、実際の経験を通して、より広くより高貴な働きに適したものとなっていった。……神はどのような目的をもって、われわれに訓練をお与えになるのかはだれにもわからない。しかし、小事に忠実であることがより大きな責任を負わせられるのにふさわしい証拠であることは、だれにも明白である。人生の行為は、すべて、品性をあらわす。そして、小事を忠実にいき、「恥じるところのない錬達した働き人」となる者だけが、より大いなる働きをゆだねられて、神の栄誉を受けることができるのである。(国と指導者上巻 185, 186)

8月3日

なぜエリシャか

「わたしよりも父または母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりもむすこや娘を愛する者は、わたしにふさわしくない。また自分の十字架をとってわたしに従ってこない者はわたしにふさわしくない。」(マタイ 10:37, 38)

エリヤは神の指導のもとに後継者を求めながら、エリシャが働いていた畑を通り過ぎ、青年の肩に献身の外套をかけた。……彼にとって、これは、神が彼をエリヤの後継者として召されたしるしであった。……

エリシャは事前によく状況を見きわめて、召しを受けるか拒絶するかを自分で決定しなければならなかった。もしも彼が家庭とその利益とに執着することを望むならば、家庭にとどまることも彼の自由であった。しかし、エリシャは召しの意味を理解した。……彼はどんな世俗的利益のためであろうとも、神の使命者となる機会を見逃したり、または、神のしもべと交わる特権を犠牲にしたりしたくなかったのである。……彼はちゅうちょすることなく、彼を愛した家庭を去って、預言者の不安定な生活につき従っていった。(国と指導者上巻 187, 188)

何か直接宗教的な働きに携わっていないという理由で、自分たちの生涯はなんの役にも立たず、神の国の進展のために何もしていないと感じる者が多い。もし彼らが何か偉大なことをすることができれば、どんなに喜んでそれをするのであろう。しかし、彼らはただ小さい事しかできないから、何もしないでよいと考える。これは誤りである。人は、伐採、開墾、耕作などの日常の普通の仕事をしながら、神のために活発な奉仕に携わることができるのである。子供をキリストのために訓練する母親は、講壇に立つ牧師と同様の働きを神のためにしているのである。

もし行えば、人生を香ばしいものにする身近の義務を見過ごしにしていながら、何か驚くべき働きをする特別な才能を待望している者が多い。……成功は才能ではなくてむしろ、活動力と快く事に当たる精神によるのである。われわれが神に喜ばれる奉仕ができるのは、りっぱな才能を持っているからではなくて、日ごとの務めを良心的に果たし、満足感を持ち、素朴さを失わずに、心から他の人々の幸福を願うことにあるのである。どんなに卑しいと思われる境遇においても真の美德を見出すことができる。愛のこもった忠実さをもって行われるごく平凡な務めが、神の目に麗しいのである。(同上 187)

すべてを祭壇の上に

「イエスは言われた、『手をすきにかけてから、うしろを見る者は、神の国にふさわしくないものである。』（ルカ 9:62）」

われわれすべてのものは、エリシャのように奉仕することも、また、持っているものを皆売るようにも求められてはいない。しかし、神は、われわれが神への奉仕をわれわれの生活の第一のものとし、この地上において、神の働きを進展させるために、一日に何かを必ず行うことを求めておられるのである。神はわれわれがみな同じ種類の働きをすることを期待しておられない。外国で働くように召される者もあれば、福音の事業を支えるために、財産を献げるように求められる者もある。神は各自の献げ物をお受けになる。必要なのは生涯とそのすべての影響力とを献げることである。このような献身をする者は、天の神の召しを聞いて、従うのである。……

最初、エリシャに要求されたのは、大きな仕事ではなかった。普通一般の務めが、なお、彼の訓練を構成する要素であった。彼はその師、エリヤの手に水を注いだと言われている。彼は主がお命じになることを何でも喜んで行った。そして、そのたびに、彼は謙遜と奉仕の教訓を学んだ。……

エリシャは、エリヤに従ってから後の生涯において誘惑を受けなかったわけではなかった。彼は多くの試練を受けた。しかし、その危急の時に、彼はいつも神に寄り頼んだ。あとに残した家庭のことを考えるように誘惑されたが、彼はこの誘惑に心を留めなかった。彼は手をすきにつけてから、後ろを見るまいと決心した。そして、さまざまな試練を経て、委ねられた任務に忠実であることを示した。……

エリシャが預言者エリヤに従って学校を巡回した時に、彼の信仰と決心とがもう一度試みられた。ギルガルまたベテルとエリコにおいても、預言者は、彼に引き返すように勧めるのであった。……しかし……彼はその目的からそれることを好まなかった。……

「そして……エリヤはエリシャに言った、『わたしが取られて、あなたを離れる前に、あなたのしてほしい事を求めなさい』」。

エリシャは世的榮譽や地上の偉人たちの間の高い地位を求めなかった。彼が渴望したのは、今まさに天に移される榮譽にあずかろうとしているエリヤに豊かに注がれていた聖霊が豊かに与えられることであった。彼は、神が彼を召されたイスラエルにおける地位に彼を適したものにするのは、エリヤに宿っていた聖霊以外にないことを知っていた。そして彼は「どうぞあなたの霊の二つの分をわたしに継がせてください」と願ったのである。（国と指導者上巻 189-195）

8月5日

エリヤの後継者

「ここで、あなたがたに奥義を告げよう。わたしたちすべては、眠り続けるのではない。終りのラッパの響きと共に、またたく間に、一瞬にして変えられる。というのは、ラッパが響いて、死人は朽ちない者によみがえらされ、わたしたちは変えられるのである。」(コリント第一 15:51, 52)

エリヤは砂漠の中で寂しさと失望のあまり、もはやじゅうぶんであると言い、彼の命がとられることを願ったのであった。しかし、主は彼をあわれんで、その言葉をお受けにならなかった。エリヤにはまだなすべき大きな働きがあった。そして、その働きが終わった時に、彼は失望と孤独のうちに死んでしまうのではなかった。彼は墓に下るのではなくて、天使とともに神の栄光のみ前に昇っていくのであった。

「エリヤはこれを見て『わが父よ、わが父よ、イスラエルの戦車よ、その騎兵よ』と叫んだが、再び彼を見なかった。そこでエリヤは自分の着物をつかんで、それを二つに裂き、またエリヤの身から落ちた外套を取り上げ、帰ってきてヨルダンの岸に立った。そしてエリヤの身から落ちたその外套を取って水を打ち、『エリヤの神、主はどこにおられますか』と言い、彼が水を打つと、水は左右に分れたので、エリヤは渡った。エリコにいる預言者のともがらは彼の近づいて来るのを見て、『エリヤの霊がエリヤの上にとどまっている』と言った。そして彼らは来て彼を迎え、その前に地に伏した。

主はみ摂理のうちに彼が知恵をお授けになった人々を、神の働きから取り除くことをよしとされる場合、もしもその後継者たちが、神の助けを仰ぎ望んで神の道に歩くならば、彼らを助け、力をお与えになるのである。彼らはその先輩たちよりも賢くさえるのである。なぜならば、彼らは先輩たちの経験から利益を得、その誤りから知恵を学ぶことができるからである。(国と指導者上巻 195, 196)

力の人エリヤは、巨大な悪を倒すために、神から用いられた器であった。……エリヤの後継者として、注意深く忍耐強くイスラエルを安全な道に導くことのできる人物が必要であった。この働きのために、エリヤは、若い時から神の導きのもとに訓練をうけ、準備されていた。……

人生の行為の一つ一つは、品性の現われである。小さな事ながら、「恥じるところのない錬達した働き人」であることを自ら示す者だけが、神よりいっそう大きな信任を受ける栄誉が与えられるのである。(教育 58)

汚れと清め

「エリシャは水の源へ出て行って、塩をそこに投げ入れて言った、『主はこう仰せられる、「わたしはこの水を良い水にした。もはやここには死も流産も起らないであろう』。』（列王記下 2:21）

エリシャは苦い水の源に塩を投げ入れることによって、数世紀後、救い主が「あなたがたは、地の塩である」と言って、弟子たちに教えられたのと同じ霊的教訓を教えたのである（マタイ 5:13）、汚染された泉に混ぜられた塩は、その水を清めて、これまで暗い影と死をもたらしていたところに、生命と祝福をもたらすようになった。神が神の民を塩にたとえられたのは、神が彼らに恵みをほどこされたのは、彼らがその人々を救う器になるためであるという神のみこころを彼らに教えるためであった。……

塩はそれを加えた物質とよく混ぜねばならない。保存するためには塩は浸透しなければならない。そのように人々に福音の救済の力が及ぶのは、個人的な接触と交わりによってである。人々は集団としてではなく、個人として救われるのである。個人的な感化には力がある。それは、キリストの感化とともに働き、……世界の腐敗の進行をとどめるべきである。……それは、熱心な信仰と愛を伴った純粋な模範の力によって、他の人々の生活と品性を高め、美化しなければならない。……

汚染された水は神から離れた魂を代表している。……罪によって、人間全体が変調をきたし、精神は邪悪になり、想像力は腐敗した。人間の機能も墮落した。純粋の宗教と心の清さが欠けている。悔い改めに導く神の力が品性を改変させるに至っていない。……

神の言葉を受け入れる人は、蒸発してしまう水たまりや、大切な水を失ってしまうこわれた水たまりのようなものではない。それは、つきない泉を源とする山間の流れのようなもので、岩間に飛び散って輝くその冷たい水は、疲れた人や、どの渴いた人、重荷を負っている人々を活気づけるのである。それは絶え間なく流れる川のようなものである。そして、それは流れていくにつれて、ますます深く広くなって、ついにその生命を与える水は全地をおおうに至るのである。……

神の真の子供もそれと同じである。キリスト教は、活気にみなぎった普遍の原則、生きた活動的霊的活力となってあらわれる。真理と愛という天の影響に心が開かれる時に、これらの原則は、再び砂漠の中の川のように流れ始めて、今、不毛と飢饉に悩む地に、豊かな実りをもたらすのである。（国と指導者上巻 199-201）

8月7日

譴責された無礼

「あなたは白髪の人の前では、起立しなければならない。また老人を敬い、あなたの神を恐れなければならない。わたしは主である。」(レビ記 19:32)

エリシャは穏やかで、親切な心の持ち主であった。しかし、彼がまた厳しい態度をとることができたことは、彼がベテルへ行く途中で、町から出て来た神を敬わない青年たちにあざけられた時にとった行動によって示されている。この青年たちはエリヤの昇天のことを聞いていた。そして、彼らはこの厳粛なでき事をあざ笑って、「はげ頭よ、のぼれ。はげ頭よ、のぼれ」と言った(列王紀下 2:23)。預言者は彼らの声を聞いてふり返ってみた。そして、全能者であられる神の靈感によって、彼らをのろった。続いて起こった恐ろしい刑罰は神からのものであった。「すると林の中から二頭の雌ぐまが出てきて、その子供らのうち四十二人を裂いた」。

もし、エリシャが、あざけりを見過ごしにしたならば、彼は引き続いて乱暴者たちにあざけり、ののしられて厳粛な国家的危機における彼の教育と救済の任務が挫折するかもしれなかったのである。このただ一度の恐怖すべき厳格さのあらわれは、彼の一生を通じて人々の尊敬を勝ち得るのに十分なでき事であった。彼は 50 年間にわたって、ベテルの門に出入りし国内の至るところの町々を往き来し、怠惰で乱暴で、放蕩に身を持ちくずした若者たちの群れの間を通り過ぎた。しかし、だれひとりとして、彼をあざけり、または、彼が持つ至高者であられる神の預言者としての資格をさげすむ者はなかった。……

エリシャをあざ笑った青年たちに欠けていた尊敬の念は、注意深く育てなければならない美徳である。どの子供にも神に対する真の崇敬の念を教えなければならない。神のみ名を軽々しく、または、不注意に口にしてはならない。天使たちはそれを語る時に 彼らの顔をおおうのである。われわれ墮落した罪深い人間は、どんな敬虔な態度をとってそれを口にすべきなのであろうか。……

礼儀もまた、御霊の結ぶ美徳の一つであって、すべての者が養うべきものである。礼儀はともすれば激しく粗暴になり勝ちな性質をやわらかにする力がある。キリストの弟子であると言いながら、粗暴で、不親切で、礼儀に欠けているものは、まだイエスから学んでいないのである。彼らは疑いもなく誠実で、その高潔さについても疑念はないであろう。しかし、誠実と高潔とは、親切と礼儀の欠けていることのつぐないとはならない。(国と指導者上巻 203-205)

荒野に食卓

「見よ、主の目は主を恐れる者の上であり、そのいつくしみを望む者の上にある。これは主が彼らの魂を死から救い、きぎんの時にも生きながらえさせるためである。」(詩篇 33:18, 19)

エリシャは人類の救い主の型であった。そして、彼は救い主のように、彼の働きにおいていやしの働きと教えの働きを結合させた。エリシャはその長期にわたる力強い活動を通じて、預言者の学校によって行われていた重要な教育の働きを育成発展させるために、たゆまず、忠実に努力した。……

彼が毒の入ったかまをもとどおりになおしたのは、彼がギルガルに設立された学校を訪問中のことであった。……

また、エリシャは、まだきぎんが地にあった時に、「バアル・シャリシャ」の人から贈られた「初穂のパンと、大麦のパン二〇個と、新穀一袋」とによって、百人に食を与えた。……

キリストが彼の使者によって、飢えを満たすためにこの奇跡を行われるとは、何というキリストの慈悲深さであろう。主イエスは必ずしもこれほど著しく、また、感知できるものではなくても、その時以来、何度となく、人間の必要を満たすために働かれたのである。……

少量のものの上に注がれる神の恵みが、それを満ち足りたものにする。神のみ手はそれを百倍に増すことができる。神はその資源の中から、荒野において食事の用意をすることがおできである。神はみ手を触れて、わずかの食物を増加させて、すべての者を満ち足らせられるのである。預言者のとまがらの手の中でパンと穀物とを増し加えたのは、神の力であった。……

主がなすべき働きをお与えになるときに、その命令が道理にかなったものであるか、または、従おうと努力すれば、どんな結果が生じるかなどを、人間は問うてはならない。手もとにあるものは、満たすべき必要のためには、十分でないかもしれない。しかし、主の手の中にあればあり余ったものとなるのである。しもべは「それを彼らの前に供えたので、彼らは食べてなお余した。主の言葉のとおりであった」。……

神は感謝と祝福を祈り求めつつ神に献げるものを預言者のとまがらや疲れた群衆に与えられた食物を増し加えられたように増し加えてくださるのである。(国と指導者上巻 208, 211)

8月9日

子供であっても

「さきにスリヤびとが略奪隊を組んで出てきたとき、イスラエルの地からひとりの少女を捕えて行った。彼女はナアマンの妻に仕えたが、」(列王記下 5:2)

この少女は家庭から遠く離れた奴隷であったけれども、神の証人の一人で、神がご自分の民としてイスラエルを選ばれた目的を無意識のうちに達成したのである。彼女がその異教の家庭で仕えていた時に、彼女の主人を気の毒に思った。そして、エリシャが行なった驚くべきいやしの奇跡を思い出して、その女主人に向かって、「ああ、御主人がサマリヤにいる預言者と共におられたらよかったですように。彼はその重い皮膚病をいやしたことでしょう」と言った。彼女は、エリシャには天の神の力が宿っているのを知っていた。そして、この力によってナアマンはいやされると信じたのである。

異教の家庭における捕らわれの少女の行動とその態度は、初期の家庭訓練の力を力強く証明している。父親と母親にゆだねられた任務の中で、子供の保護と訓練ほど重要なものはない。両親は習慣と品性の基礎そのものを築かなければならない。彼らの模範と教育とによって、子供たちの将来の大半が決定されてしまうのである。

その生活が真に神を反映し、神の約束と命令が子供の中に感謝と崇敬の念を起こさせるような両親は幸福である。また、そのやさしさと正義と忍耐とが、神の愛と正義と忍耐を子供たちに解明し、彼らに対する愛と信頼と服従を教えることによって、天の神に対する愛と信頼と服従を教える両親は幸福である。このような賜物を子供に与える両親は、あらゆる時代のすべての富よりも尊い宝、永遠に至る宝を子供に授けるのである。

われわれは子供たちがどのような奉仕に召されるかを知らない。彼らは家庭の中で一生を過ごすかもしれない。また人生の一般の職業に従事することであろう。あるいは、異教の地に福音の教師として出かけるであろう。しかし、すべての者は同じく神のための伝道者、世界に対するあわれみの使者として召されているのである。(国と指導者上巻 212, 213)

また幼いイスラエルの娘をシリヤの大將ナアマンを助けるために送られた神は、今日、青年男女を自分の代表者として神の助けや指導を必要とする人々へつかわされるのである。(ミストリー・オブ・ヒーリング 457)

神の方法

「わが思いは、あなたがたの思いとは異なり、わが道は、あなたがたの道とは異なっていると主は言われる。天が地よりも高いように、わが道は、あなたがたの道よりも高く、わが思いは、あなたがたの思いよりも高い。」(イザヤ 55:8, 9)

スリヤ人ナアマンはいまわしい病気、らい病を治すことのできる方法について神の預言者に助言を求めたところヨルダン川へ行つて、七度水浴びをするようにと命じられた。なぜ彼は神の預言者であるエリシャの指示に、ただちに従わなかったのであろうか。……屈辱感と失望によって、ナアマンは短気になりかっとなつて、神の預言者にうながされた謙遜な行動をとることを拒んだ。彼は、「わたしは彼がきつとわたしのもとに出てきて立ち、その神、主の名を呼んで、その箇所の上に手を動かして、らい病をいやすのだらうと思った。ダマスコの川アバナとバルパルはイスラエルのすべての川水にまさるではないか。わたしはこれらの川に身を洗つて清まることができぬのであろうか」と言つて、「こうして彼は身をめぐらし、怒つて去つた。」彼の僕は「わが父よ、預言者があなたに、何か大きな事をせよと命じて、あなたはそれをなさらなかつたでしょうか。まして彼はあなたに(単に)『身を洗つて清くなれ』と言うだけではありませんか」と言つたのである。そのとおりであつて、この勇士はこのたいしたことのないヨルダン川へ行つて身を洗うというのは自分の威厳をそこねると考えたのであつた。彼が名を挙げ、願つたその川は周囲にある木々や木立で美しくされ、その木立のここかしこに偶像がまつられていた。多くの者が自分たちの偶像神を拜むためにこれらの川に集まつたので、彼にとってそこへ行くことは屈辱になるのではなかつた。しかし預言者の明確で具体的な指示に従うことは、彼の自尊心と高慢な精神をへりくだらせることになるのであつた。自発的な従順は望んでいた結果をもたらす。彼は身を洗い、元通りになつた。(教会への証 2 卷 309, 310 太字筆者強調)

わたしたちの計画が必ずしも神のご計画であるとは限らない。……わたしたちが自分のことを知っている以上にわたしたちを理解しておられる神は、わたしたちを愛し配慮してくださることにより、しばしば人間が利己的な野心を満足させることを許されない。……神は当然捧げるべきものを数多く要求されるが、それを実行することによって、わたしたちは天へ行く途上の妨害となるものを捨てていくにすぎない。……この地上でわたしたちを悩まし、失望させた不思議な出来事も、きたるべき国では明らかとなり、答えられそうにもないと思つた祈りや、また実現しなかつた希望も、わたしたちに最大の祝福であつたことがわかる。(ミストリー・オブ・ヒーリング 457, 456)

8月11日

火の車ではなく

「またわたしは、天からの声がこう言うのを聞いた、『書きしるせ、「今から後、主にあつて死ぬ死人はさいわいである』。御霊も言う、『しかり、彼らはその労苦を解かれて休み、そのわざは彼らについていく。』」（黙示録 14:13）

エリシャには火の車に乗って、彼の師に従うことは許されなかった。主は彼が長い病の床に伏すことをお許しになった。長時間にわたる人間的弱さと苦しみの中で、彼の信仰はしっかりと神の約束を把握し、彼の回りに慰めと平和をもたらす天使たちを常に眺めた。ドタンの高原において、陣をしく天の軍勢と、イスラエルの火の戦車とその騎兵たちを見たのと同じように、彼は今、思いやり深い天使たちの存在を感じて支えられたのである。彼はその一生を通じて強い信仰を働かせた。そして、神の摂理と神の慈悲深い寛容とが十分に理解されるにつれて、その信仰は神に対する永続的信頼となつていった。そして、死が迫つてきたとき、彼にはその働きを休む用意ができていたのである。……

エリシャは……確信をもって、「しかし神はわたしを受けられるゆえ、わたしの魂を陰府の力からあがなわれる」と言うことができた。彼は喜びをもって、「わたしは知る、わたしをあがなう者は生きておられる、後の日に彼は必ず地の上に立たれる」。「しかしわたしは義にあつて、み顔を見、目ざめる時、みかたちを見て、満ち足りるでしょう」とあかしすることができた。（国と指導者上巻 230, 231）

キリストはご自分のみ名を信じるすべての者をご自分の者であると主張される。人間の内に宿つておられるキリストのみ霊の生命を与える活力は、すべての信じる魂をイエス・キリストに結びつける。イエスを信じる者はこのお方の心にとつて聖なる者である。なぜならこの人々の命はキリストと共に神の内に隠されているからである。……

よみがえりの朝はなんと栄光にあふれた朝であろうか。キリストが信じる者たちの感嘆を受けるために来られる時、なんと素晴らしい光景が展開することであろうか。キリストと共にそのへりくだりと苦しみにあずかった者はみな、このお方と共にその栄光にもあずかるのである。キリストの死からのよみがえりによって、イエスにあつて眠っているすべての信じる聖徒は、勝利のうちに、その獄屋から出てくる。よみがえつた聖徒たちは、「死よ、おまえのとげはどこにあるのか。墓よ、おまえの勝利はどこにあるのか」と宣言する（コリント第一 15:55 英語訳）。（セリテッド・メッセージ 2 巻 271, 272）

気の進まない預言者

「立って、あの大きな町ニネベに行き、これに向かって呼ばわれ。彼らの悪がわたしの前に上ってきたからである。」(ヨナ 1:2)

ニネベは、悪に染まったとは言っても、全く罪惡に満ちてしまったのではなかった。「すべての人の子らを見」られる方(詩篇 33:13)、…その町の多くの人々が、より良くより高尚な何物かを得ようとしており、もし生ける神を知る機会が与えられれば、その悪い行いを捨てて、神を礼拝するようになることを、ごらんになった。…神は、神の知恵をもって、間違いようのない方法で、ご自分を彼らに現し、できることならば、彼らを悔い改めに導こうとされた。

この働きのために召された器は、…預言者ヨナであった。…

もしヨナが、何の疑いもはさまずに従ったならば、彼は多くの苦い経験に遭うこともなく、豊かに祝福されたことであろう。しかし、ヨナが失望に陥った時にも、主は、彼をお見捨てにならなかった。種々の試練と不思議な摂理によって、神とつきることのない神の救いの力に対するヨナの確信は、回復されるのであった。…

神のしもべヨナはもう1度、ニネベに警告の言葉を発するように命じられた。…

ヨナは、町に入るや否や、「これに向かって呼ばわ」り、「四〇日を経たらニネベは滅びる」と言った(ヨナ 3:4)。彼は、警告の言葉を発しながら、通りから通りを進んだ。

その使命はむだではなかった。神を信じない町の通りに鳴りひびいた叫びは、口から口に伝えられて住民全体は、驚くべき宣言を聞いたのである。神の霊が、すべての人の心にこの使命を強く印象づけて、多くの人々が彼らの罪のためにふるえおののいて、深く恥じ入り、悔い改めるに至った。…

彼らは、滅びを免れ、イスラエルの神は、異邦世界全土において、賛美され栄光を帰せられ、神の律法はあがめられた。ニネベが、神を忘れ、傲慢になったがために、周囲の国々の犠牲になるのは、それからずっと後になってからであった。…

これは、今日の神の使命者たちに対する教訓である。諸国の都市は、古代のニネベと同様に、真の神の性質と目的を知らなければならない。…いつまでも続く唯一の都は、神がもくろみ、建てられた都である。…主イエスは、彼に仕えるしもべたちを用いて、人々に清い望みをもって永遠の嗣業を確保するために努力するように呼びかけておられる。(国と指導者下巻 232-242)

8月13日

限度がある

「見よ、主はそのおられる所を出て、地に住む者の不義を罰せられる。地はその上に流された血をあらわして、殺された者を、もはやおおうことがない。」(イザヤ 26:21)

われわれの神は、あわれみの神である。神は、神の律法を犯した罪人たちを忍耐深く、憐れみをもって扱われる。…

しかし、神の忍耐の尽きる時がくる。そして、神の刑罰が必ず下るのである。主は、人々や町々を長く忍んで、神の怒りから彼らを救うために、彼らを憐れんで警告を発せられる。しかし、憐れみを請い求める声がついにやみ、真理の光を拒否し続けた人々は、消し去られる。…

人間の力ではいやすことのできない悲しみが、この世界に起こる時が、近づいている。神の霊が取り去られつつある。海にも陸地にも、次々と急速に災害が起こる。地震、大竜巻、火事、洪水による破壊、人命財産の大損害などを、なんと度々耳にすることであろう。一見、こうした災害は、人間の力を超えた自然の猛威が突発的に起こしたものであると思われるであろう。しかし、その中にあって、神のみこころを悟ることができるのである。神は、こうした方法によって、人々に、彼らの危険を自覚させようとしておられるのである。

大都会における神の使命者たちは、救いのよきおとずれを伝える一方において、当面しなければならぬ罪悪、不正、墮落などについて失望してはならないのである。…暴力と犯罪に満ちたどの町においても、正しく教えられるならば、イエスの弟子になることができるものが多くいるのである。…

今日、地上の住民に対する神の言葉はこれである。「だから、あなたがたも用意をしていなさい。思いがけない時に人の子が来るからである」(マタイ 24:44)。…

われわれは、どのような時代にもなかったような危機の門口に立っている。…

神の怒りの嵐が迫っている。ヨナが宣教した時のニネベの住民のように、あわれみの招待を受け入れて、支配者であられる神の律法に従って、清められる者だけが、それに耐えることができる。滅びが過ぎ去るまで、キリストと共に神のうちに隠されるのは、義人だけである。(国と指導者上巻 243-245)

わたしをおつかわしてください

「わたしはまた主の言われる声を聞いた、『わたしはだれをつかわそうか。だれがわれわれのために行くだろうか』。その時わたしは言った、『ここにわたしがおります。わたしをおつかわしてください。』」（イザヤ 6:8）

イザヤが預言の働きに召されたのはまだ若い時であって、困難と失望という状況の下であった。災難がこの国をおびやかしていた。ユダの人々は神の律法への違反により、このお方の守りを失っていたので、アッシリヤの軍隊がユダ王国に向かってくるのであった。しかし外敵の危険が最も大きな心配事ではなかった。主の僕にこの上ない深い失望をもたらしていたのは人々の邪悪さであった。民は背教と反逆によって神のさばきを招き始めていた。この若い預者は警告のメッセージを民にもたすようと召されていたのであるが、彼は自分が執拗（しつよう）な抵抗にあうことを知っており……自分の働きはほとんど希望がないように思えたのであった。……

イザヤが聖なる宮の柱廊に立った時、このような思いが彼の心を占めていたのであった。突然門と宮の内幕が持ちあげられるか引き降されるように思えて、預言者ですら入ることの許されていない至聖所の内を見ることを彼は許された。高く上げられたみ座に座っておられるエホバ、その衣のすそが神殿にみちているお方の幻にイザヤの目がとまった。み座の両側には、セラピムがつき従い、二つ翼で自らをささえ、二つの翼でうやうやしくその顔を覆い、二つの翼でその足をおおっていた。……

イザヤはこれまで、これほど完全にエホバの偉大さとまたその完全な聖潔に気づいたことはなかった。そして自分の人間としての弱さと無価値さのゆえに、神のご臨在の前では滅びる以外にはないと感じたのであった。「わざわいなるかな」と彼は言った、「わたしは滅びるばかりだ。わたしは汚れたくちびるの者で、汚れたくちびるの民の中に住む者であるのに、わたしの目が万軍の主なる王を見たのだから。」しかしセラピムのひとりが、イザヤをその大いなる使命にふさわしくするために彼のところへ来た。祭壇から取った燃えている炭を彼の唇にふれて、「見よ、これがあなたのくちびるに触れたので、あなたの悪は除かれ、あなたの罪はゆるされた」と言った。そして神の言われる声が聞こえた。「わたしはだれをつかわそうか。だれがわたしのために行くだろうか。」聖なる確信をもってイザヤは「ここにわたしがおります。わたしをおつかわしてください」と応えた。……預言者は自分の前にある働きに対して気づかされたのであった。（教会への証 5 巻 749-751）

8月15日

謙遜—まことかそれとも偽りか

「互に呼びかわして言った。『聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍の主、その栄光は全地に満つ。』」（イザヤ 6:3）

これらの聖天使たちは、罪に汚れていないくちびるで神の栄光を歌っていた。彼（イザヤ）が創造主にささげるのを習慣にしていた弱々しい讃美と、セラピムの熱烈な讃美との対照は、預言者を驚かせ謙遜にした。……

彼が天使の歌声を聞いているときに、主の栄光、無限の力、比類なき尊厳が、彼の目の前を通り過ぎた。そして彼の魂に感銘を与えた。彼が耐えられるだけの神のご品性の啓示というたくいなき光に照らされて、彼自身の内面の汚れが、驚くべき明瞭さで彼の前にはっきりと見えた。自分の言葉そのものが彼には卑しく思えた。

このように、神が人間に対して覆いを取り去り、神の僕が天の神の栄光を見るのを許され、イスラエルの聖者の清さをほんのわずかででも認めるとき、彼は自分の清さを誇るどころか、自分の魂の汚れについて驚き、それを告白することであろう。深い悔い改めをもってイザヤは叫んだ、「わざわいなるかな、わたしは滅びるばかりだ。わたしは汚れたくちびるの者で」ある。……これは、多くの人々が、見せびらかすべき徳と考えているように思える、わざとらしい謙遜や卑屈な自責の念ではない。こういう曖昧としたまねごとの謙遜は、誇りと自尊心に満ちた心によって促される。言葉で自分をけなしてみせ、それが他人からの賞賛と感嘆の表現を呼び起こさないのがっかりする人々が多い。（SDA バイブルメンタリー [E・G・ホワイト・コメント] 4 巻 1140）

み座の前のセラピムは神の栄光を見ていて、うやうやしい畏敬の念に満たされているので、彼らは自己満足の思いで自分を見たり、自分や互いを賞賛する思いで見たりすることは一瞬もない。彼らの讃美と賞賛は……万軍の主のためである。……彼らは神に栄光を帰すことに満足しきっており、神の臨在の中で、神の是認というほほえみの下、彼らにはそれ以上望むものは何もない。神のみかたちを身につけて、神に仕え、神を礼拝することによって、彼らの最高の大望は完全に達成されているのである。（同上）

燃えている炭

「この時セラピムのひとりが火ばしをもって、祭壇の上から取った燃えている炭を手に携え、わたしのところに飛んできて、わたしの口に触れて言った、『見よ、これがあなたのくちびるに触れたので、あなたの悪は除かれ、あなたの罪はゆるされた』。」(イザヤ 6:6, 7)

イザヤは他の者たちの罪を宣告したが、今彼は自ら宣告したのと同じ罪の宣告にさらされている自分を見る。彼は神を礼拝するとき、冷たい命のない儀式に満足していた。彼はこの事を、その幻が主から与えられるまで知らなかった。聖所の神聖さと尊厳を見たとき、自分の知恵と才能はなんと小さく見えたことであろう。彼はなんと無価値であったことだろう。聖なる奉仕になんとふさわしくなかったことだろう。……

イザヤに与えられた幻は、最終時代の神の民の状態を表している。彼らは、天の聖所で進行している働きを信仰によって見る特権がある。「そして、天にある神の聖所が開けて、聖所の中に契約の箱が見えた」。彼らが信仰によって至聖所の中を見ると、天の聖所でのキリストの働きが分かる。自分たちが汚れたくちびるの民であることを自覚する。」すなわち、その唇がしばしばむなしいことを語っている者であり、そのタラントが神の栄光のために清められ用いられてこなかったことに気づく。彼らは、自分の弱さと無価値さを、キリストの栄光に満ちたご品性の清さや美しさと比較して絶望するかもしれない。だがもし彼らが、イザヤのように、主が与えようと望まれる印象を受け入れ、神の前に心を低くするなら、彼らに望みはある。約束の虹はみ座の上であり、イザヤのためになされた働きが、彼らの内になし遂げられるであろう。神は、悔いた心から出てくる嘆願に応答される。(SDA バイブルコメンタリー- [E・G・ホフ・コメント] 4 巻 1139)

私たちは祭壇から取った燃える炭を唇に置いていただきたいと願う。「あなたの悪は除かれ、あなたの罪はゆるされた」という言葉を聞きたいと願う。(同上)

燃える炭は清めの象徴である。それが唇にふれると、清くない言葉はそこから出てこなくなる。(同上 1141)

8月17日

雪のように白い

「いと高く、いと上なる者、とこしえに住む者、その名を聖となえられる者がこう言われる、『わたしは高く、聖なる所に住み、また心砕けて、へりくだる者と共に住み、へりくだる者の霊をいかし、砕ける者の心をいかし。』（イザヤ 57:15)

イザヤは、神殿の中で与えられた幻によって、イスラエルの神の品性をはっきりと知ることができた。「いと高く、いと上なる者、とこしえに住む者、その名を聖となえられる」方が、大いなる威光の中で彼の前に現れたのである。しかし、イザヤは、彼の主のあわれみ深いご性質を理解することができた。……

イザヤは、……神を眺めて、自分自身の無価値なことを悟っただけではなかった。彼のへりくだった心に、完全で十分なゆるしの確証が与えられた。そして彼は、変化した人間として立ち上がった。彼は、彼の主を見たのである。彼は、神の品性の麗しさを眺めたのであった。彼は、無限の神の愛を眺めることによって起こった変化についてあかしをすることができた。その時以来、彼は、道を誤ったイスラエルが罪の重荷と罰とから解放されるのを見たいという熱望を抱くようになった。「あなたがたは、どうして重ね重ねそむいて、なおも打たれようとするのか」とイザヤはずねた。「さあ、われわれは互に論じよう。たといあなたがたの罪は緋のようであっても、雪のように白くなるのだ。紅のように赤くても、羊の毛のようになるのだ。」……

彼らが、仕えると言いながら、その品性を誤解していた神が、彼らの前に、霊的病の大いなる治癒者として示されたのである。……

無限の愛の神は、自力ではサタンのはなから逃れることができないと考えている人々を助けたいと切望しておられる。そして、神のために生きる力を与えようと恵み深くも仰せになっている。「恐れてはならない、わたしはあなたと共にいる。驚いてはならない、わたしはあなたの神である。わたしはあなたを強くし、あなたを助け、わが勝利の右の手をもって、あなたをささえる」。……

読者よ、あなたは、自分勝手な道を選んだであろうか。あなたは、神から遠くさ迷い出たであろうか。あなたは、罪の実を食べようとして、それがあなたのくちびるで灰に変わるのを経験したであろうか。……あなたの天の父の家に帰れ。神は「わたしに立ち返れ、わたしはあなたをあがなったから」。「耳を傾け、わたしにきいて聞け、そうすれば、あなたがたは生きることができる。」(国と指導者上巻 278-283)

すべての者のために

「君たちにエジプトに出てこさせてください。エチオピアには急いでその手を神に伸べさせてください。」(詩篇 68:31 英語訳)

イザヤはその働きの全期間を通して、異教徒に対する神のみこころについて明白なあかしを立てたのである。他の預言者たちも神の計画について述べはしたが、彼らの言葉は必ずしも理解されたとは限らなかった。しかし、神のイスラエルの中には、肉によるアブラハムの子孫ではない多くの人々が数えられるという真理を、ユダに明らかに示すようにイザヤは命じられた。この教えは彼の時代の神学と一致していなかったが、それでも彼は恐れることなく神から与えられた使命を伝え、アブラハムの子孫に約束された霊的祝福を渴望していた多くの人々に希望を与えたのである。……

イスラエルの人々はしばしば、異邦人に対する神のみこころを理解することができず、また、理解しようとしなかった。しかし、彼らが分かたれた民となり、地上の諸国の間で独立した国家として確立されたのは、実にこの目的のためであった。まず最初に契約が与えられた、彼らの先祖アブラハムはその親族を離れて遠くの地へ出て行き、異邦人に光を掲げる ように召されたのである。彼に与えられた約束のなかには、子孫が海の砂のように多くなるが含まれてはいたが、彼がカナンの地で大いなる国家の父になることは、何も利己的な目的のためではなかった。……「わたしは…あなたを祝福し、あなたの名を大きくしよう。……地のすべてのやからは、あなたによって祝福される。」……

神は国籍、人種、または階級などの差別をお認めにならない。彼はすべての人類の創造主であられるのである。すべての人々は、創造によって一つの家族である。そしてすべての人々は、贖罪によって一つなのである。すべての魂が自由に神に近づくことができるように、キリストはすべての差別の壁を取り除き、神殿のすべての部屋を広く開けるために来られた。彼の愛は広く深く十分に満ちあふれていて、どんなところにも滲透していくのである。それは、サタンの影響を受けてその欺瞞に惑わされた人々を引き上げて、約束の虹に囲まれている神のみ座近くに彼らを置くのである。キリストにあってはユダヤ人もなければギリシア人もなく、奴隷も自由人もないのである。(国と指導者上巻 335-338)

8月19日

エレミヤ、神の代弁者

「主の救を静かに待ち望むことは、良いことである。」(哀歌 3:26)

ヨシヤの治世に起こった改革の結果、永久的な靈的復興が起こることを望んだ人々の中にエレミヤがいた。彼はまだ若かったにもかかわらず、…神に召されて預言者となった。…

神は若いエレミヤをごらんになって、彼が信頼にこたえ、大きな反対に遭っても正義のために立つ者であることを認められた。…

主は彼の選ばれた使者に命じて言われた。「あなたはただ若者にすぎないと言ってはならない。だれにでも、すべてわたしがつかわす人へ行き、あなたに命じることをみな語らなければならない。彼らを恐れてはならない、わたしがあなたと共にいて、あなたを救うからである」。

エレミヤは40年の間、真理と義の証人として国民の前に立たなければならなかった。彼は未曾有(みぞう)の背教の時代にあつて、その生活と品性において、唯一の真の神の礼拝を実証しなければならなかった。恐るべきエルサレムの包囲の時に、彼は主の代弁者とならなければならなかった。(国と指導者下巻 29, 30)

エレミヤは生まれつき臆病でしりごみする性質だったので、平和で静かな引きこもった生活を望み、彼の愛する故国がいつまでも悔い改めないのを見る必要のない所を望んだ。彼の心は罪が引き起こした荒廃状態を眺めて、激しく痛んだ。…

エレミヤは青年時代、また働きの後年において経験したことによって、「人の道は自身によるのではなく、歩む人が、その歩みを自分で決めることができないことを」学んだ。彼は「主よ、わたしを懲らしてください。正しい道にしたがつて、怒らずに懲らしてください。さもないと、わたしは無に帰してしまうでしょう」と祈ることを学んだ(エレミヤ 10:23, 24)。

彼が悩みと悲しみとの杯を飲むように召され、悲惨のうちに「わが榮えはうせ去り、わたしが主に望むところのものもうせ去った」と言う誘惑に遭った時に、彼は、彼のために伸べられた神の摂理のみ手を思い出して、勝ち誇って叫んだ。「主のいつくしみは絶えることがなく、そのあわれみは尽きることがない。これは朝ごとに新しく、あなたの真実は大きい。わが魂は言う、『主はわたしの受くべき分である、それゆえ、わたしは彼を待ち望む』と」。(同上 41, 42)

レカブ人

「ところでエレミヤはレカブびとの家の人々に言った、『……あなたがたは先祖ヨナダブの命に従い、そのすべての戒めを守り、彼があなたがたに命じた事を行った。それゆえ、万軍の主、イスラエルの神はこう言われる、レカブの子ヨナダブには、わたしの前に立つ人がいつまでも欠けることはない。』（エレミヤ 35:18, 19)

神はレカブ人たちを主の館、神殿の一室に集めて、彼らの前に酒を出し、飲むように勧めるようにとエレミヤに命じられた。エレミヤは主が命じられたように行なった。しかし「彼らは答えた、『われわれは酒を飲みません。それはレカブの子であるわれわれの先祖ヨナダブがわれわれに命じてあなたがたとあなたがたの子孫はいつまでも酒を飲んではならない』……と言ったからです」と言った。

「その時主の言葉がエレミヤに臨んだ……『行って、ユダの人々とエルサレムに住む者にと告げよ。「主は仰せられる。あなたがたはわたしの言葉を聞いて教を受けないのか。レカブの子ヨナダブがその子孫に酒を飲むなと命じた言葉は守られてきた。彼らは今日に至るまで酒を飲まず、その先祖の命に従ってきた』」。ここで神はレカブ人の服従とご自分譴責と警告の言葉を受け入れようとしない民の不服従と反逆とを対比しておられる。……レカブ人は神の民が預言者によって譴責された事柄を拒んでいた間に自分たちの準備のできた心からの服従のゆえにほめられたのである。(教会への証 4 巻 174, 175)

もし、不節制の害悪から子孫を守るために、最善で最高的手段をとった善良で賢明な祖先の要求に厳重に従う価値があるとすれば、神は人間よりも聖なるおかたであるから、われわれはさらに敬虔な気持ちで神の権威を尊ばなければならぬ。無限の力を持ち、恐ろしいさばきを行われる、われわれの創造主であり指揮者であられる神は、なんとかして人々に罪を認めさせ、悔い改めに至らせようとしておられる。神は、彼のしもべたちの口によって不服従の危険を予告される。神は警告を与えてはつきりと罪を譴責される。神の民は、神が選ばれた器の絶え間ない保護という神の恵みが与えられてこそ、繁栄を保つことができる。神は神の勧告を拒否し神の譴責を軽んじる人々を支え守ることはおできにならない。神は、しばらくの間、刑罰が下るのを止められる。しかし、神はいつまでもみ手を止めておくことはおできにならないのである。(国と指導者下巻 46)

8月21日

擁護されたエホバの名誉

『彼と共にいる者は肉の腕である。しかしわれわれと共にいる者はわれわれの神、主であって、われわれを助け、われわれに代って戦われる』。民はユダの王ヒゼキヤの言葉に安心した。」(歴代志下 32:8)

ヒゼキヤは彼の治世の初期においては、アハズが結んだ協定に基づいてアッシリアに貢ぎ物を納めていた。一方王は「つかさたちおよび勇士たちと相談して」、王国を防衛するためにできる限りの手をつくした。……

永く予想されていた危機が、ついにやって来た。勝利に勝利を得ていたアッシリアの軍勢が、ついにユダヤに近づいた。……

今や、ユダの唯一の救いの望みは神であった。エジプトからの援助はことごとく切断され、援助の手を差しおける他の国は近くなかった。……

セナケリブ王は、「手紙を書き送って、イスラエルの神、主をあざけり、かつそしって言った、『諸国の民の神々が、その民をわたしの手から救い出さなかったように、ヒゼキヤの神も、その民をわたしの手から救い出さないであろう』」(歴代志下 32:17)。

ユダの王は嘲笑の手紙を受け取った時に、それを神殿に持っていき、「主の前にそれをひろげ、」天からの助けが与えられるという強い信仰をもって祈り、ヘブルびとの神が今もなお生きて支配しておられることを、地の諸国が知るようにと祈った(列王紀下 19:14)。主の栄誉が危機にさらされていた。救いをもたらすことができるのは彼だけであった。……

ヒゼキヤは何の希望も与えられずに放置されなかった。イザヤは人をつかわして、王に言った。「イスラエルの神、主はこう仰せられる、『アッシリアの王セナケリブについてあなたがわたしに祈ったことは聞いた』。……

救いが与えられたのは、まさにその夜のことであった。「主の使がでて、アッシリアの陣営で 18 万 5 千人を撃ち殺した」(同 19:35)。……

ヘブル人の神は、高慢なアッシリア人を打ち負かしたのである。周囲の国々の目の前で、主の名誉が保たれた。エルサレムでは、人々の心は聖なる喜びに満たされた。熱心に救いを呼び求めた彼らの嘆願には、罪の告白と多くの涙が混じっていた。彼らは大いなる緊急事態において、神の救いの力に全く信頼していた。そして神は彼らに失望をお与えにならなかった。(国と指導者上巻 315-327)

神の癒し

『ああ主よ、わたしが真実と真心をもってあなたの前に歩み、あなたの目にか
なうことをおこなったのをどうぞ思い起してください。』そしてヒゼキヤは激しく泣い
た。」(列王記下 20:3)

ヒゼキヤ王は、その栄えた治世の最中に、突然致命的な病気にかかった。「死
にかかっていた」彼の病気は、人間の力ではどうすることもできないものであった。
預言者イザヤが彼の前にあらわれて、「主はこう仰せられます、あなたの家を整理
しておきなさい。あなたは死にます、生きながらえることはできません」と言った時
に、彼の最後の望みの綱は絶たれたように思われたのである(イザヤ 38:1)。

なおる見込みは全くないと思われた。しかし、王はこれまで彼の「避け所また
力」、「悩める時のいと近き助けであ」られたお方に祈ることができたのである(詩
篇 46:1)。「そこでヒゼキヤは顔を壁に向けて主に祈って言った。……

その「いつくしみは絶えることがな」いお方が、彼の祈りを聞かれた(哀歌
3:22)。「イザヤがまだ中庭を出ないうちに主の言葉が彼に臨んだ、『引き返して、
わたしの民の君ヒゼキヤに言いなさい、「あなたの父ダビデの神、主はこう仰せら
れる、わたしはあなたの祈を聞き、あなたの涙を見た。見よ、わたしはあなたを
いやす。』……

預言者イザヤは喜んで引き返して行って、確証と希望の言葉を伝えた。イザヤ
はいちじくのかたまりを病気の個所につけることを指示して、王に神の憐れみと保
護の使命を伝えた。(国と指導者上巻 303 - 305)

祈りによっていやされようと求めている者は与えられている治療法を用いるの
を怠ってはならない。苦痛を和らげ、健康を回復する自然の働きを助けるために
神が備えられた治療法を用いることは……信仰の否定にはならない。神は生命
の法則に関する知識を人間の力で得られるようになされた。この知識はわたした
ちが利用するために手の届くところにおかれている。健康回復のためにはあらゆる
手段、できるかぎりの好機を利用して自然の法則に調和するように働かなけれ
ばならない。病人がいやされるようにと祈るとき、神と協力する特権を感謝し、
神が備えられた手段が祝福されるように願いつつ、さらに力を入れて働くことが
できる。(ミストリー・オブ・ヒーリング 209, 210)

8月23日

彼らは何を見るか

「イザヤは言った、『彼らは、あなたの家で何を見ましたか』。ヒゼキヤは答えて言った、『彼らは、わたしの家にある物を皆見ました。倉庫のうちには、彼らに見せなかった物は一つもありません』。」(イザヤ 39:4)

使者たちがヒゼキヤを訪問したことは、彼の感謝と献身を試すためであった。……もしヒゼキヤが、イスラエルの神の力と恵みと憐れみについてあかしを立てるために、彼に与えられた機会を活用したならば、使者たちの報告は暗黒を照らす光となったことであろう。しかし彼は、万軍の主よりも自分自身を賛美したのである。「しかしヒゼキヤはその受けた恵みに報いることをせずその心が高ぶった」(歴代志下 32:25 上句)。……

ヒゼキヤが自分に与えられた信任に背いた物語は、すべてのものに重大な教訓を教えている。われわれは自分たちの経験の中の尊いでき事、神の憐れみといつくしみ、また、救い主の愛の比類のない深さなどについて、これまでよりもっと多く語らなければならない。われわれの心と思いが神の愛に満たされている時に、霊的生活のことを他の人々に伝えることは難しくなくなる。偉大な思想、高尚な熱望、真理についての明快な理解、無我の目的、敬虔な生活と聖潔への願望などは言葉となってあらわれ、心に秘められた宝がどんなものであるかを示すのである。

われわれが日ごとに交わる人々は、われわれの助けと指導を必要としている。彼らの心は、折にかなつて語られる言葉に力づけられる状態にあることであろう。これらの人々の中には、明日ふたたび接することができなくなってしまう者がある。われわれはこれらの旅の道づれに、どんな感化を及ぼしていることであろうか。(国と指導者上巻 309 - 312)

あなたの友人や知人はあなたの家で何を見たのであろうか。あなたはキリストの恵みという宝を表す代わりに、使用することによって朽ちてしまう物を飾り立てているのだろうか。あるいは、あなたが接することになったその人々に、キリストのご品性と働きについての何か新しい考えを伝えているのだろうか。……ああ、神が驚くべきことをくださったその人々が、神をほめたたえ、その力強い御業を語るとよいのだが。しかし、神が働いて下さるその人々が、どれほどしばしば、ヒゼキヤのように、自分たちの祝福すべての与え主であられる方について忘れ易いのであろうか。(サイン・オブ・ザ・タイムズ 1902年10月1日)

信仰と神のみ約束

「見よ、その魂の正しくない者は衰える。しかし義人はその信仰によって生きる。」
(ハバクク 2:4)

ヨシヤが治め始めた時、そしてその久しい以前から、ユダの国の心から神を信じる人々は、古代のイスラエルに対する神の約束は果たして成就されるのだろうかと疑っていた。……

こうした切実な疑問を預言者ハバククは発した。彼はその時代の忠実な人々の状態を見て、彼の心の重荷を表現して次のようにたずねた。「主よ、わたしが呼んでいるのに、いつまであなたは聞きいれて下さらないのか」。……

そしてハバククは、信仰をもって間近に迫った将来の悲しむべき状態のかなたを眺め、神に信頼する民に対する神の愛をあらわした尊い約束を把握して、次のようにつけ加えた。「わたしたちは死んではならない」。彼はこの信仰の宣言をもって、彼自身の運命とすべての信じるイスラエルの人々の運命とを、憐れみ深い神のみ手に委ねたのである。……

あの大いなる試練の時代に、ハバククおよびすべての聖徒たちとすべての義人たちを力づけた信仰は、今日、神の民を支えるのと同じ信仰であった。キリスト信者は、最も暗黒で最も険悪な状態のもとにあって、すべての光と力の源に寄り頼んでいることができる。日ごとに神を信じる信仰によって、希望と勇気を新たにすることができる。「義人はその信仰によって生きる」。……

われわれは預言者たちや使徒たちが試した信仰を抱いて、それを強めるようにしなければならない。それは神の約束をしっかりと把握して、神がお定めになった時と方法によって救いをお与えになるのを待つ信仰である。預言の確かな言葉は、われわれの主、救い主イエス・キリストが、王の王、主の主として栄光のうちに再臨なさるときに、完全に成就するのである。……

われわれは、未曾有の背信の時代にあって、ユダを励まそうと努力した預言者と共に次のように言おう。「主はその聖なる宮にいます、全地はそのみ前に沈黙せよ」(ハバクク 2:20)。「この幻はなお定められたときを待ち、終りをさして急いでいる。それは偽りではない。もしおそれれば待つておれ。それは必ず臨む」(同 2:3)。(国と指導者下巻 4-7)

8月25日

酔いすぎて思考力がない

「七日目にアハシュエロス王は酒のために心が楽しくなり、王の前に仕える七人の侍従メホマン、ビズタ、ハルボナ、ビグタ、アバグタ、ゼタルおよびカルカスに命じて、王妃ワシテに王妃の冠をかぶらせて王の前にこさせよと言った。これは彼女が美しかったので、その美しさを民らと大臣たちに見せるためであった。」(エステル 1:10, 11)

この命令が出た時、ワシテは彼の命令を実行しなかった。なぜなら、彼女は酒が大量に使われていたことと、アハシュエロスがすでに酔っていたことを知っていたからであった。彼女自身と同様、夫のためにも、彼女は宮廷の女性の頭としての彼女の立場を離れまいと決心した。(SDA パイブルコメント [E・G・ホイト・コメント] 3巻 1139)

王が祝宴に出席して酒に酔いつぶれた男たちに、王妃の美しさを見せようとして彼女を呼ばせたのは、酒を飲んで彼の理性が失われていた時であった。彼女は、純粋な良心に調和して行動した。ワシテは、王が本来の自分に戻った時、彼女のとった行動をほめるだろうと考えて、王の命令に従うことを拒んだ。しかし、王には賢明でない忠告者たちがいた。彼らは女性に権限を与えることになり、女性にとっても損失となるであろうと主張した。(同上)

役職がどんなに高くても、人々は神に従う義務がある。王たちによって行使された大きな権力は、しばしば自己称揚という極端に至らせる。そして無価値な誓いが、より高い神の律法を無視し、大きな不正に導く法律を制定させることになった。

エステル記の一章に描写されているような道楽の行事は神に栄光を帰さない。しかし、それでも主は、他人を誤りに導く人々を通してでも、み旨を達成される。もし神が抑制のみ手を差し出さなければ、不思議なことが見られるであろう。しかし、神はご自分の目的を達成なさるために、その人が間違った習慣に従い続けていたとしても、その人の心に印象を与えられる。そして、主は、ご自分の知恵の教訓を認めない人々を通してでもご自分の計画をやり遂げられる。全ての地上の支配者の心は、主の手の中にあるのであって、主はご自分のみ旨にしたがって、川の水の向きを変えられるように、彼らの心をどのようにでも変えられるのである。(同上)

このような時のために

「あなたがこの国に迎えられたのは、このような時のためでなかったとだれが知りましょう。」(エステル 4:14)

ユダヤ人が殺されて、その財産を奪い取る日が決定された。王はこの詔が実行されたならば、どんな重大な結果が起こるかを、少しも知らなかった。サタン自身がこの策略の背後で暗躍して、真の神の知識を保っている人々を地上から滅ぼし去ろうとしていたのである。……

メド・ペルシャの法令は、取り消すことができなかった。一見、絶望のように思われた。イスラエル人は皆殺しにされるのであった。

しかし敵の策略は、人間の子らを支配しておられる神の力によって打ち破られた。神の摂理のうちに至高者を恐れるユダヤの女性エステルが、メド・ペルシャ王国の王妃になっていたのである。モルデカイは彼女の親せきであった。彼らは窮地に追いこまれて、ユダヤ民族のためにクセルクセスに訴えることにした。エステルはとりなす者として、王の面前に危険を冒して出るのであった。モルデカイは、「あなたがこの国に迎えられたのは、このような時のためでなかったとだれが知りましょう」と言った。

エステルが当面した危機は、真剣な努力を急速にする必要があった。しかしエステルもモルデカイもともに、神が彼らのために大いなる働きをして下さるのでなければ、彼ら自身の努力は無益なことを知っていた。そこでエステルは、力の源であられる神と交わる時間をとったのである。エステルはモルデカイに、次のように答えさせた。「あなたは行ってスサにいるすべてのユダヤ人を集め、わたしのために断食してください。……わたしとわたしの侍女たちも同様に断食しましょう。そしてわたしは法律にそむくことですが王のもとへ行きます。わたしがもし死なねばならないのなら、死にます。」(国と指導者下巻 205, 206)

イスラエルの歴史の重大な危機に王妃エステルに向かって「あなたがこの国に迎えられたのは、このような時のためでなかったとだれが知りましょう」と言われた言葉が、今日の重大な時にあたって、福音の光に照らされたすべての家庭、すべての学校、すべての親、すべての教師に向かって発せられているのである。(教育 311)

8月27日

神のおきて対人間の法令

「龍は、女に対して怒りを発し、女の残りの子ら、すなわち、神の戒めを守り、イエスのあかしを持っている者たちに対して、戦いをいどむために、出て行った。」(黙示録 12:17)

王妃エステルを通して、主はご自分の民のために力強い救出を成し遂げられた。一時は彼らを救う力がないように思えたとき、エステルと彼女に付き添う女性たちは、断食と祈りと敏速な行動によって問題に取り組んだ。そして彼らの民に救いをもたらした。(SDA パイブルコメンタリー [E・G・ホイト・コム] 3巻 1140)

エステルの時代に神の民を訪れた苦しい経験は、ただその時代だけのものではなかった。…各時代において、人々に真の教会を迫害させた同じ精神が、将来も、神に忠誠をつくす者に対して同様の行動を取らせるに至るのである。…

最後に神の残りの民に対して出される布告は、ユダヤ人に対してアハシュエロス(クセルクセス)が発したものと非常によく似ている。今日、真の教会の敵は、安息日の戒めを守る小さな群れを、門に座しているモルデカイのように思っている。神の民が神の律法を敬うことは、主を恐れることを放棄して神の安息日をふみにじっている者に対して、間断なき譴責である。……

地位の高い人々や有名人は、不法者や悪人に加担して、神の民に対して策略を練る。富を持った人、特殊の才能の持ち主、教育のある人などが一つになって彼らを軽べつする。迫害を加える支配者たち、牧師や教会員たちが彼らを滅ぼそうと陰謀を企てる。この人々は声と筆、誇張と脅迫と嘲笑などによって、彼らの信仰をくつがえそうとする。人々は偽りの申し立てと、怒りを含んだ訴えによって民衆の怒りをかき立てようとする。聖書的安息日の擁護者に対して、「聖書はこう言っている」ということができないので、彼らは圧制的法令に訴えて、自分たちに欠けているものを補う。立法者たちは民衆の人気と支持を得るために、日曜休業令に屈服する。しかし神を恐れる者は、十戒の戒めに反する法令に従うことはできない。真理と誤りの間の最後の大争闘は、この論点において戦われるのである。そしてわれわれは、その結果について何の疑惑ももたないのである。エステルとモルデカイの時代におけると同様に、今日においても主は、神の真理と神の民とを擁護されるのである。(国と指導者下巻 208, 209)

バビロンにおける四人の青年

「この四人の者には、神は知識を与え、すべての文学と知恵にさととい者とされた。」
(ダニエル 1:17)

ダニエルとその同僚たちは少年時代に正しい教育と訓練に恵まれたが、しかし彼らをあのようにりっぱな人物にしたのは幼いころの恵まれた教育だけではなかった。自分で行動しなければならない時、すなわち彼らの将来が彼ら自身の行為で決する時がきたのであった。そのとき彼らは子供の時分に教えられた教訓に忠実に従う決心をした。(青年への使命 238)

この気高いヘブルの青年たちはなんとという高貴な一生の働きをなし遂げたことであろう。彼らは、その育った家庭に別れをつげたとき、自分の崇高な運命を夢にも思わなかったであろう。神の導きに忠実にそして堅実に従った彼らを通して、神の御目的が成就されたのである。(教育 54)

バビロンでのダニエルとその同僚たちの青年時代は、エジプトでのヨセフの初期の生活にくらべてはるかに幸運であったようにみえる。しかし、彼らもまたヨセフに劣らない激しい品性の試練をうけた。王族の血統をうけたこれらの青年たちは、比較的質素なユダヤの家庭から、最も繁華な都会へ、しかも時の最大の君主の宮廷へ移され、国王の特別の奉仕のために選び出されて教育を受けることになった。腐敗した豪華な宮廷では彼らを取り囲んでいる誘惑は強かった。…

彼らの食物を国王自身の食卓から与えるようにとの命令は、彼らの幸福を願う王の心づかいと愛情のあらわれであった。しかし、国王の食物の一部分は偶像にささげられていたので、その食卓の食物は偶像礼拝の供え物であった。王から賜わる食物をとることによって、青年たちは、国王と共に偶像神をあがめているものとみなされるのであった。(同上 51, 52)

ダニエルと若い同僚たちの歴史はその後の各時代の若い人たちのために聖書のページに記録されている。彼らが節制の原則に実に従った記録を通して、神は今日の青年男女に語っておられる。そして青年男女がクリスチャンの節制という問題について神から与えられている尊い光を集めて健康の法則に正しく身を処するように命じておられる。(青年への使命 238)

8月29日

知恵の源

「ただ、どうか主があなたに分別と知恵を賜い、あなたをイスラエルの上に立たせられるとき、あなたの神、主の律法を、あなたに守らせてくださるように。」(歴代志上 22:12)

ダニエルと彼の仲間たちは、バビロンの知恵を得るに当たって、同僚の学生たちよりもはるかによい成績を取めた。しかし彼らの知識は偶然の結果ではなかった。……彼らは自分たちを、すべての知恵の源であられる神に結びつけた。そして神を知ることとを彼らの教育の基礎としたのである。彼らは信仰をもって知恵が与えられることを祈り求め、彼らの祈りを実践したのである。彼らは、神の祝福にあずかることができる状態にその身をおいていた。彼らは彼らの能力を弱めるものを避けた。そしてあらゆる方面の学問の理解を深める機会はすべて活用した。彼らは知力を与えずにはおかない生命の法則に従った。彼らはただ一つの目的、すなわち神の栄光をあらわすことのために、知識を得ようとしたのである。彼らは異教主義という偽宗教のただ中であって、真の宗教の代表者として立つためには、明晰な頭脳を持ち、キリスト者品性を完成すべきであることを自覚した。そして神ご自身が彼らの教師であった。彼らは絶えず祈り、忠実に研究し、目に見えないお方との接触を保ちつつ、エノクのように神と共に歩んだのである。

どのような方面の仕事においても真の成功を取めることは、偶然または何かのはずみによるものでも、運命によるものでもない。それは神の摂理のなすところであり、信仰と思慮分別、徳と忍耐の報いである。立派な知的特質と崇高な道徳的性質とは偶然の結果ではない。神は機会をお与えになる。成功は、人間が機会をいかに活用するかにかかっている。……

神の恵みはわれわれのうちに働いて、願いを起こさせ、実現に至らせるのであるが、われわれの努力の代わりに与えられることは決してないのである。

主はダニエルとその仲間たちに協力なされたように、主のみこころを行おうと努力するすべての者と協力なさるのである。そして彼は、彼らに聖霊を与えて、すべての真の動機とすべての気高い決意を強化なさるのである。服従の道を歩む者は、多くの困難に出会うのである。強く陰險な勢力が、彼らを世に結びつけることであろう。しかし主は、彼の選民たちを敗北させようとするあらゆる努力を無に帰すことができである。彼らは主の力に頼ってすべての誘惑に打ち勝ち、すべての困難を征服することができるのである。(国と指導者下巻 97, 98)

妥協はしない

「わたしを尊ぶ者をわたしは尊(ぶ)。」(サムエル記上 2:30)

ダニエルと彼の同僚の経験によって、わたしたちには食欲をほしいままにするという誘惑に打ち勝つ原則の勝利についての事例がある。この事例は宗教上の原則を通して、若い人々が肉の欲に打ち勝ち、大きな犠牲を払うとしても、神のご要求に忠実であることができることを、わたしたちに示している。

もしダニエルと彼の同僚が異邦の役人と妥協して、その場の圧力に屈し、バビロン人の習慣通りに食い飲みしていたらどうなっていたであろうか。原則からほんの少しでもはずれたなら、彼らの正義に対する感覚も悪に対する嫌感も弱まっていたことであろう。食欲の放縦は体力、明晰な頭脳、霊的能力を減じていたことであろう。一步、間違った方向に踏み出すと、天とのつながりが切れるまで反対方向へ導かれ、人は誘惑に押し流されてしまうのである。……

ダニエルがゆるぎのない信頼をもって自分の神にすがりつくと同時に、預言をする能力の霊が彼にくだった。彼は宮廷生活の原則を学びながら未来の神秘を読み、型と比喩を通して、終りの時代に起こる驚くべき事柄を、きたるべき世代に示すために、神から教えを受けたのであった。(ユース・イン・ストラクター 1903年6月25日)

神は、人がたえず向上し、最も高い標準に日毎に到達していくようにと計画された。わたしたちが自ら努力しようと求めるなら、このお方は助けてくださる。現世と来世における幸福についてのわたしたちの希望は現世におけるわたしたちの向上による。あらゆる点においてわたしたちは不節制への第一歩を警戒すべきである。若い方々よ、神はご自分の恵みを通してあなた方が行うことのできる働きをするようにと召しておられる。……ダニエルの嗜好や食欲、また習慣にたちうちできる嗜好や食欲、そして習慣の純潔を示しなさい。神はあなたに、穏やかな精神、明晰な頭脳、弱まることのない判断力をもって報いてくださる。原則にゆるがず堅く立っている今日の若者は、身体と精神と魂の健康をもって祝福されるであろう。(同上7月3日)

8月31日

証

「すなわち、自分のからだを打ちたたいて服従させるのである。そうしないと、ほかの人に宣べ伝えておきながら、自分は失格者になるかも知れない。」(コリント第一 9:27)

神がバビロンにおいて、神のためにあかしを立てるようにダニエルを召されたのと同様に、今日世界において神の証人となるように、われわれをお召しになる。神はわれわれが人生の最大の事柄におけると同様に、最小の事柄においても神の国の原則を人々に示すことを望まれる。日ごとに神に対する忠実さをあらゆる機会を見失っているながら、何か大きな仕事を持ち込まれるのを待っている人々が多くいる。……

真のキリスト者の生活において、重要でないというものはない。全能の神の目には、すべての義務は重要なのである。主はあらゆる奉仕の可能性を正確に量られるのである。用いられた能力と全く同様に、用いられなかった能力もまたその責任が問われる。われわれは、なすべきであったが、神の栄光を現すためにわれわれの能力を用いなかったために、達成することができなかったことについてもさばかれるのである。

高貴な品性は、偶然の結果ではない。それは神の摂理の特別な恵み、または賜物によるものでもない。それは自己訓練の結果であり、低級な性質を高級な性質に従わせ、神と人間への奉仕のために自己を降伏させる結果である。……

肉体は、心と魂とが、品性建設のために発達する最も重要な媒体である。それゆえに魂の敵は肉体の力を弱め、低下させるために、彼の誘惑を向けてくるのである。彼がここにおいて成功することは、しばしば、人間全体が悪に降伏することを意味するのである。肉体的性質の傾向は、高等な能力の支配下におかれないうえ、必ず破滅と死をもたらすのである。身体は人間の高等な能力に従わせなければならない。情欲は意志に支配されるべきであって、意志自身は神の支配の下になければならない。神の恵みによって清められた意志の支配力が、生活を統治すべきである。知能の力、肉体のスタミナ、寿命などは、不変の法則に依存している。これらの法則に従うことによって人間は、自分自身の勝利者、自分自身の性癖の勝利者、「……やみの世の主権者、また天上にいる悪の霊に対」して勝利者となることのできる(エペソ 6:12)。(国と指導者下巻 99, 100)

研究 7

わたしたちが信仰の一致に到達するまで



「一つ」とその証拠

わたしたちが信仰の一致に達するのは、ヨハネ3章16節が成就するためです。「一つ」と言われる神様のみ思いを見ていきましょう。

一つ

「そして彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。わたしは彼らに一つの心と一つの道(方法)を与えて常にわたしを恐れさせる。これは彼らが彼ら自身とその後の子孫の幸を得るためである」(エレミヤ 32:38, 39)。

「イエスは彼に言われた、『わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。』」(ヨハネ 14:6)。「主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ。すべてのものの上であり、すべてのものを貫き、すべてのものの内にいます、すべてのものの父なる神は一つである」(エペソ 4:5, 6)。

神様が「一つ」と言われるとき、それはご自分との関係を意味します。このお方が唯一の神であられるため、このお方とつながるとき、その結果は「一つ」です。そして、そこに至る道も唯一であると言われました。この一致は、万物の元であられるお方から出て、このお方へと至らせませす。

くちびる

「その時わたしはもろもろの民に清きくちびるを与え、すべて彼らに主の名を呼ばせ、心を一つにして主に仕えさせる」(ゼパニヤ 3:9)。

この清いくちびるは、イエス様のくちびるです。このくちびるは語るために与えられていますが、語るべきことは何でしょうか。エペソ4章にある一致とその結

果です。

「あなたがたが召されたその召しにふさわしく歩き、できる限り謙虚で、かつ柔和であり、寛容を示し、愛をもって互に忍びあい、平和のきずなで結ばれて、聖霊による一致を守り続けるように努めなさい。からだは一つ、御霊も一つである。あなたがたが召されたのは、一つの望みを目ざして召されたのと同様である。主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ。すべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのものの内にいます、すべてのものの父なる神は一つである。しかし、キリストから賜わる賜物のはかりに従って、わたしたちひとりびとりに、恵みが与えられている。…降りてこられた者自身は、同時に、あらゆるものに満ちるために、もろもろの天の上にまで上られたかたなのである。そして彼は、ある人を使徒とし、ある人を預言者とし、ある人を伝道者とし、ある人を牧師、教師として、お立てになった。それは、聖徒たちをととのえて奉仕のわざをさせ、キリストのからだを建てさせ、わたしたちすべての者が、神の子を信じる信仰の一致と彼を知る知識の一致とに到達し、全き人となり、ついに、キリストの満ちみちた徳の高さにまで至るためである。こうして、わたしたちは…愛にあつて真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達するのである。また、キリストを基として、全身はすべての節々の助けにより、しっかりと組み合わせられ結び合わされ、それぞれの部分は分に応じて働き、からだを成長させ、愛のうちに育てられていくのである。…あなたがたはたしかに彼に聞き、彼にあつて教えられて、イエスにある真理をそのまま学んだはずである。すなわち、あなたがたは、以前の生活に属する、情欲に迷って滅び行く古き人を脱ぎ捨て、心の深みまで新たにされて、真の義と聖とをそなえた神にかたどって造られた新しき人を着るべきである。こういうわけだから、あなたがたは偽りを捨てて、おのおの隣り人に対して、真実を語りなさい。…悪い言葉をいっさい、あなたがたの口から出してはいけない。必要があれば、人の徳を高めるのに役立つような言葉を語って、聞いている者の益になるようにしなさい。…」(エペソ4章)。

「わたしは、エペソ人への手紙第4章の使徒パウロの言葉を指し示す。この章全体は、神が、わたしたちに学んで実行することを望んでおられる教訓である。

エペソ人への手紙第4章で、神は大変わかりやすく、また単純に、すべての神の子らが真理をつかむようにと神のご計画を啓示しておられる。ここに、教会

員が世に対して健全な宗教経験を表すことのできるよう、教会における一致を保つために神が定められた方法がわかりやすく述べられている」(SDA バイブル・コメント [E・G・初作・コメント] 6 巻 1117 [エペソ 4 章コメント])。

「悪い言葉というのは、…卑しく俗悪な言葉ばかりではない。それは、思いからキリストの見方を失わせるもの、魂から真の同情と愛を除くすべての言葉である。それは、キリストの愛が表現されておらず、キリストに似ていない品性の感情を表す言葉である」(同上)。

しかし、このきよい神の言葉は、きよいくちびるから語られなければなりません。もし、水が清くても、その水を入れたコップが汚ければ、どうでしょうか? 差し出された人は飲むことができるでしょうか。

「イエスは人々の困難をよく知っている者として、彼ら自身の立場に立って人々に応対された。彼は真理を最も率直で単純な方法で示すことによって、それを美しいものとされた。イエスのことばは純潔で、洗練されていて、流れる川のように澄んでいた。イエスのお声はラビたちの単調な調子にききなれた人たちにとって音楽のようだった。しかし、教えは単純であったが、イエスは権威を持つ者として語られた。この特徴のために、イエスの教えはほかのすべての人たちの教えと対照的だった」(各時代の希望上巻 316)。

イエスの語られる真理はまた非常に単純でした。単純に語るためには、その前に良く咀嚼(そしゃく)されている必要があります。つまり、考えない人は、単純に語ることはできないのです。なぜなら、思想の要点がわからないからです。しかし、イエスは神の思想を語るのに、辞書を用いなければ理解できないような言葉はお用いになりませんでした。言葉の難解さは、思想の高尚さを表すものではありません。しかし、その言葉は、神の愛を知るきよめられたくちびるから語られました。このお方に学んで弟子たちはどうでしょうか。

「イエスの弟子たちはきれいなことばを使うことで有名だった」(各時代の希望下巻 208)。

この言葉によって、「世が信じるようにな」ったのです。彼らは、「主よ、では、足だけではなく、どうぞ、手も頭も」とイエスにすべてを洗っていただきました。くちびるもイエスに洗われたのです。では、どのように洗われるのでしょうか。

「キリストがそうなされたのは、水で洗うことにより、言葉によって、教会をき

よめて聖なるものとするためであり」(エペソ 5:26)。彼らを洗ったのも、このお方のみ言葉でした。今日、わたしたちを洗うのも、このみ言葉です。つまり、「イエスにある真理をそのまま」受けるみ言葉なのです。

た言葉を彼らに語ったことがありました。「見よ、わたしたちはエルサレムへ上って行くが、人の子は祭司長、律法学者たちの手に渡されるであろう。彼らは彼に死刑を宣告し、そして彼をあざけり、むち打ち、十字架につけさせるために、異邦人に引きわたすであろう。そして彼は三日目によみがえるであろう」(マタイ 20:18, 19)。

今、彼らはこのお方がご自分のよみがえりのことについて語られた多くの事柄を思い出しました。彼らは忘れたいと大いに望みながら、これらのことを忘れることができませんでした。彼らの父、悪魔と同じように、彼らは信じておののいていました。

すべてのことが彼らにイエスさまは神の御子であられると宣言していました。彼らはイエスさまが生きておられた間よりも死なれてからのほうがもっとこのお方のことについて悩まされたので、彼らは眠ることができませんでした。

彼らはこのお方を墓の中にとどめておくためにできる限りのことをしようと決心し、彼らはピラトに三日目まで墓に封印して見張るように頼みました。ピラトは祭司たちの指揮のもとに兵士の一団をおき、言いました。

「『番人がいるから、行ってできる限り、番をさせるがよい』。そこで彼らは行って石に封印をし、番人を置いて墓の番をさせた」のでした(マタイ 27:65, 66)。

夏野菜のラタトゥイユ

〔材料〕

なす	1本
人参	1本
ズッキーニ	1本
玉ねぎ	1個
セロリ	1本
ピーマン	2個
完熟トマト	5個
ニンニク	ひとかけ
オリーブオイル	大さじ2
昆布だし(顆粒)	4g
塩	小さじ1
ローリエ	1枚

〔作り方〕

1. なすは一口大に切って、薄い塩水に10分くらいつけてあく抜きをします。ざるに上げて、水気を拭き取ります。
2. その他の野菜も一口大に切ります。
3. トマトも同じくらいの大きさに切ります。
4. ニンニクはみじん切りにします。
5. 鍋にオリーブオイルとニンニクを入れて火にかけます。
6. 玉ねぎとセロリとなすを炒めます。
7. その後、ピーマンとトマト、調味料を加え、中火から弱火で20～30分煮込みます。途中アクを取ります。
8. 材料が柔らかくなり、トマトでよく煮込まれたら、出来上がりです。

水を入れずにトマトだけで煮込んだラタトゥイユ。

トマト、ナス、ピーマンなどの夏野菜は、水分を保持しやすい体にします。

教会プログラム (毎週土曜日)

安息日学校 : 9:30-10:45 (公開放送)

礼拝説教 : 11:00-12:00 (公開放送)

午後の聖書研究 : 14:00-15:00

【公開放送】 <http://www.4angels.jp>



聖書通信講座

※無料聖書通信講座を用意しております。

□聖所真理

お申込先 : 〒 350-1391 埼玉県狭山郵便局私書箱 13 号「福音の宝」係
是非お申し込み下さい。



書籍

【永遠の真理】 聖書と証の書のみに基づいた毎朝のよみもの。



【安息日聖書教科】 は、他のコメントを一切加えず、完全に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムです。



イエスの物語

第53話

ヨセフの墓の中に(II)

ヨセフは岩に掘られた新しい墓を持っていました。彼は自分のためにそれを作りましたが、それを今、イエスさまのために準備しました。そのお体をニコデモが持ってきた香料と共に麻布で包み、あがない主は墓に運ばれました。

ユダヤ人の役人たちはキリストを死に至らせることに成功しましたが、彼らは安らかに休むことができませんでした。彼らはこのお方の大いなる力をよく知っていたからです。

彼らのうちのある者たちはラザロの墓のそばに立ち、死人が命によみがえらせられるのを見たのでした。彼らはキリストが自ら、死からよみがえって、ふたたび彼らの前に現れるのではないかとの恐れに打ち震えました。

彼らはこのお方がわたしには自分の命を捨てる力があり、またそれをふ

たたび受ける力があると群衆に言っておられるのを聞いていました。

彼らはこのお方が「この神殿をこわしたら、わたしは三日のうちに、それを起こすであろう」と言われたのを覚えていました(ヨハネ 2:19)。そして彼らはそれがご自身のお体のことを語っておられたということを知っていました。

ユダはキリストがエルサレムへの最後の旅の道中で、ご自分の弟子たちに次のように言われ



(43 ページに続く)